

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
な か ま 編 集 委 員 会
〒285-0025
佐倉市 錦木町 198-3
電話 (043) 485-1801

2 ページ	日本縦断・鉄道の旅...	都築洋子	小篠塚城址.....	斎藤 雄
3 ページ	黄昏の青春.....	吉井 弘	稲葉家の足跡を訪ねて..	赤川匡宏

吾輩はひよどり

田村 孝則

吾輩はひよどりのヒ チヤンである。我が鳥の名は古くは義経のひよどり越え、佐倉武家屋敷の先にある「ひよどり坂」に出てくるほか、近くは総理大臣の退任演説の中で、むくどりと間違えられるなど、夙に有名である。

野鳥図鑑には、「ギヤーギヤー」とうるさく鳴き、体は濃灰色、尾羽、目先、頬は栗褐色。昆虫や木の実のほか、柿、農作物もつづくので農家を困らせる。都会のセミが減ったのはひよどりのせい」と農家とセミの仇のごとく書いてある。弁解はしないが、偏見と悪意に満ちた解説であることを断言しておく。

さて、聞くところによると吾輩は猫の額ほどの庭にあるハナミズキに掛けられた巢の中で、四羽兄弟の末っ子として生まれらしい。一番遅く

孵化したので、餌の時間を始めとしていつも損をしていった。吾輩の運命が大きく変わったのは巣立ちの時、親鳥に促され飛立ったのは良かったが、羽が十分生え揃っておらず、あえなく地面に墜落した。これといった分別もないためピーピー鳴いていたら、

この家の主人が、脚立を持ち出してきて古巣に戻してくれた。それでも諦めずに同じことを三、四遍繰り返したが、生憎夜半から降り出した冷雨に打たれ、仮死状態になっているところを翌朝発見された。ピクリともしない吾輩を見た主人が、水葬にするか土葬にするかと奥様とひそひそ相談をしているのが聞こえた。もう駄目だと観念していたら、冷たくなった体が見たが一瞬痙攣し、これを見た主人が試しにドライヤーを当て

てくれたお陰で九死に一生を得た。そういう訳で当家の主人には感謝しているが、名前のヒイチャンには不満がある。奥様が一生懸命吾輩に名前を喋らそうとするが、どうも長い嘴ではヒーの音が出ない。チヤン、チヤンとしか言えず大いに悔しい。それでも名前が言えるひよどりは世間広しいえども吾輩だけだろうと自負している。最後に失敗話をしておくと、普段吾輩は狭い当家の中では一番広い応接間を与えられ、自由に飛び回らせてもらっている。ところが先日鳥嫌いの来客があり、応接間に通されるやいなや、吾輩がいきなり目の前を滑空したので、殆ど卒倒しかけた。悪いことをした。

当家に住む人間についても色々書きたいが、今日はこれにて羽ペンを置く。

(編集委員)



日本縦断・鉄道の旅

「日本縦断・鉄道の旅」に夫と参加した。日本最北端の宗谷岬と九州本島最南端の佐多岬を観光することと、十八の列車を乗り継ぎ、夫婦合わせて十二種類の駅弁を食べるといふ面白い企画の旅である。日程は四泊五日。

三月某日。東京駅から新幹線に乗車した一行は、十九組三十八名。全員千葉県在住の夫婦である。最高齢は八十三歳の男性で、最年少は四十一歳の女性。

この旅では、食事時刻直前に停車する駅で、周辺の名物駅弁が積み込まれ、毎回、一組に二種類の駅弁が配られるので、選ぶのも楽しい。車内では写真を撮る人、他の車両の空席を占領して寝ている人等、思い思いに過ごしている。私は趣味のパズルを持参。退屈しない。

二日目。宗谷岬に到着。曇

っていて風が強いので、零下七度と言うが体感温度はもっと低いだろう。バスから海辺に建つ「日本最北端の碑」迄の数十分、凍っている道路で転ばないよう注意して歩く。私たちの他には誰もいない。

四日目。佐多岬の展望台は閑散としていた。眼下に果てしなく広がる大海原。日本最古の白亜の灯台。あいにく曇り空で開聞岳は見えない。

最終日。九州本島最南端の駅「西大山駅」から乗車した電車の車体には菜の花が描かれていて、千葉県民として親近感を覚える。

あれから数ヶ月。今回の旅はこれ迄とは趣の異なるもので、参加して良かったと思う。色々な御夫婦に出会ったのも貴重な体験だった。

夫婦も仲の良いのが一番。

(白銀 都築洋子)

小篠塚城址

JR佐倉駅から根郷地区に入ると、中央の城下町跡に負けず劣らず古河公方や千葉氏に端を発する数々の史跡がある。その中で過日、寿大学生の小グループ「ねごう探訪の会」が小篠塚城址を散策した。

南図書館から更に南へ向い、大篠塚農園脇を経て急坂を下ると田園風景が広がる。その左側に樹木が生い茂った小高い丘が現れた。

小道の先には狭い駐車場と植物園があり、その手前から丘の上に登ると本丸跡がある。前もって電話でお願いしていた「小篠塚城址をきれいにする会」代表の茂木さんが現れ、正慧寺の前で説明を聞いた。「房総では長元元年(一〇二八)に起きた平忠常の乱

の後、忠常の子孫たちが戦いによって荒れ果てた上総・下総の各地を開拓し、この一族は両総平氏と呼ばれていまし

た。佐倉市の莊園(印東莊)では、印東氏を名のる両総氏が現地を支配、又この莊園は成就寺を領主としていました」と。

又この城は本佐倉城の子城として位置付けられるという。私たちは、佐倉城の歴史を繙く上でも大いに参考になった。

現在小篠塚城址周辺の整備等が、地元根郷小学校児童のボランティア学習の一環として、行われている。城址に関するくわしい資料も頂き、茂木さんに丁寧に御礼を述べ帰途についた。

房総地方には大小合わせて一三八の城址があったと聞く。全城征服は無理難題としても、せめて佐倉市内の全域だけは把握したい。

古きを訪ね佐倉道

歩く足下古代の土か

(石川 斎藤 雄)

たそがれ 黄昏の青春

高齢はだれしも例外なく訪れるものである。人が人として証明する区別に「年齢」がある。住所は不定。以前は固定電話が存在証明であった。

いま、携帯で役割が変化している。そこで人として特定化する方法は「生年月日」である。個人情報として重要である。

年齢は、毎日の生活で必ず加齢する。つまり、人の究極の生活は毎日の状態から人生が成り立っていること。

日本人の生活時間では、食事時間は三食で一時間三十分という調査結果である。朝食二十五分、昼食三十分、夕食三十七分という調査データである。(国民生活調査)

黄昏の高齢者としては、人生時間を再構成する必要がある。考え方、生き方を考える。食べる時間を、その行為も検討する必要がある。

空腹で食べるということ。人との交際でめしでも食べよう。うまいものをたべたい。

自分で作った野菜、釣った魚をたべる。の四つの生活行為に転換する。それにより生活自体が変化する。

年齢は止めることが出来ないが、生活は変化し、充実して生きることが出来る。毎日の生活が、歯の管理と身体の姿勢でまわるのである。つまり、体幹により健康になるといえる。

佐倉市では、『佐倉ふるさと体操』という特異な施策がある。金哲彦著『からだが変わる体幹ウォーキング』もある。肩甲骨をいつも意識する、驚くべき運動である。このサイクルは佐倉にもある。

黄昏の青春は、長い。一度しかない人生、生き生きして過ごしたい。

(白井台 吉井 弘)

稲葉家の足跡を訪ねて

中央公民館主催の佐倉学専門講座「古今佐倉真佐子を讀む」は、三年目にて無事終了出来た。この記録は佐倉城主稲葉正知の家臣渡辺善右衛門守由の記述で、彼が佐倉に居住した正徳年間(一七一―一七二一)前後の佐倉の風俗、見聞、伝説などを詳細に綴り、彼が後に山城国淀(現京都市伏見区)で宝暦三年以前に書かれたとのこと。内容は江戸時代佐倉の出来事を中心に多岐にわたり、筆まめに記され、当時の城下町の様子が目に浮かぶ様に感じ取れる。

散策は外山信司先生自らの案内で、初回は彼の移住跡を中心に、そして海隣寺に城主稲葉正知の一族の横倒し状態のお墓に案内して頂いた。

今回は白銀から五良、愛宕、八幡神社、桔梗塚、勝胤寺等であった。私は「佐倉歴史散策の会」で毎月近隣を

歩くが、最初にびつくりした事は、成田山新勝寺の噴水公園近くの、出世稲荷堂で知られる・枳尼天堂があり、創建は不明だが明治二十一年に再建され、ご本尊の・枳尼天像は、佐倉城主稲葉丹後守正往が寄進したものとのこと。

二つ目は、JR安食駅近くの大鷲神社で、今でも「お鷲さま」の市で賑わっているが、古くは「鷲の宮」といい、明治二十六年から「大鷲神社」となった。元は稲葉家(佐倉藩主)の領地で、下総国埴生郡安食村といった。

春日局は竹千代の出世開運を祈り、願い叶って三代將軍家光となった後、大願成就のお礼として、將軍の御座船の魔除けの大鷲の彫刻を乞い受け、鷲宮に奉獻した。それは現在も社宝として拝殿に揚げられ、大事に保存されている。

(宮前 赤川匡宏)

10月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043 - 485 - 1801

〒285 - 0025 佐倉市錦木町198 - 3

わくわく道

市民カレッジ一年生夏休みの宿題として、『私の生きがい』を考えることが与えられました。良い機会なのでじっくりと取り組んでみました。

最初に、自分が「生きがい」と感じる事や時を列挙してみました。何か共通点が見つかるかもしれないと考えたからです。又、将来の指針のようなものも見つかるのではとの期待も抱きました。

列挙した内容を見ると、私が

あとがき

あれ今月は、大分残っているな。近くの駅で、『なかま』が柵の中で風に揺れてヒラヒラしている。ちよつと、悲しい。ある時は、直ぐに捌けていて残部が無い。おおー好調だ。と一喜一憂する。

「なかま」は市民の情報紙として、老若男女、様々の職業の方からの投稿で作られている。

編集は、作者の原稿を尊重する事を第一とする。しかし、読

感じる「生きがい」は健康だから感じられるものばかりでした。健康の大切さを再認識させられました。

しかし、健康は何らかの原因で、いずれ損なわれる運命にありません。

健康が損なわれても感じる事ができる「生きがい」を探すのも今後の課題かもしれません。

これから四年間、市民カレッジの仲間と、共に学び、共に行動すること、何かそのようなものが見つけられればと思っております。

（坂本初男）

みやすさも大切。句読点、常用漢字への変更等を行う。又、てにをは一つで読者に誤解を与えず分かり易くする事もできる。時には、編集委員同士で意見が食いちがつたりして、議論が延々と続く事もある。それでも三人寄れば文殊の知恵で、何とかなる。という訳で、一部でも多くの皆さんに読んで貰いたいと言っと思いが募るのである。

皆様の投稿をお待ちしておりますので、宜しく。

（横山詔正）